

陸上クラブのエースの少年二人と
コーチの女性二人が
合宿先のコテージで激しい4Pをした話
前編

朝宮竜太郎（あさみやりゅうたろう）と内田貴之（うちだたかゆき）の二人は、全国的に好成績を収めていることで有名な〇校の陸上部のエースである。

二人は他の生徒を圧倒するその才能と実力から、学校の顧問はもちろん幼少の頃から二人が通っている地域の陸上クラブの指導員からも大いに期待されている。

二人にとっては、学校の部活も陸上クラブも自分たちの実力を認め、伸ばしてくれる大切な場所であることは変わらなかったが、特に地域のクラブはずっと所属し続けてきたということでやはり思い入れが強いものがあった。

ある日、陸上クラブの会長の谷口幸三（たにぐちこうぞう）と、エース二人のコーチを任されている体育大学出身の32歳のトレーナー、中上由希子（なかがみゆきこ）が話をしていた。

「朝宮さんと内田さんの二人は本当によくやってくれているな、また記録が伸びたらしいじゃないか」

「はい、私もコーチとして本当に嬉しいです。どんどん他のクラブ生たちと差がついていますから」

「今度の大会、私は全国の〇校記録の更新も期待しているのだがね」

「〇校記録ですか・・・確かにあの二人の実力は折り紙つきですが、さすがにこれまでの記録を塗り替えるのは大変かもしれませんね」

「そうか・・・いや、でもワシは期待している。そうだ中上くん、あの二人を臨時で強化合宿にでも連れて行って鍛えてやってくれんかね？」

「えっ、合宿？ですか？」

「ああ。この間も少しその話に触れたと思うが・・・ワシはこのクラブの会長職をそろそろ引退しようと思っておるもんでな。引退する前に、過去を思い返してもそうはおらんほどの才能を持っておるあの二人に、是非〇校陸上の歴史に残る記録を出して欲しいのだよ」

「そうですか・・・はい、考えておきます。私もあの二人にかけている期待の強さは会長にも負けていませんから」

「ハハハッ・・・そうか、じゃあ頼むよ！」

突然会長に次の大会に向けての“緊急強化合宿”という提案を受け、しば

らく考えた由希子だったが、断るといふ決断をする気にはなれず、もっとも彼女自身、会長と同様に次の大会で二人が出す記録には大いに関心を向けていたこともあり、結局承諾することに決めた。

しかし自分一人だけでは大変だということで、今年からクラブのトレーナーとして入ったばかりの21歳の新人コーチ、湯浅美保（ゆあさみほ）も連れていくことにした。

陸上クラブのコーチと言えば男性の厳しいコーチをイメージする人も多いかもしいないが、このクラブに限っては特に理由があったわけではないが、何故か比較的若い女性コーチが多いという事実があった。

合宿をする場所はクラブの所在地から車で4時間以上かかる遠地。

あらゆる手配は会長がしてくれた。合宿の拠点となるのは周囲を木々に囲まれたコテージのようなところ。一応宿泊施設として提供されてはいるが、たまにやって来る近くの山の登山客くらいしか利用されることはなく、由希子たちが合宿として利用する2週間の間も、他に客の予約はなかった。

会長は二人にトレーニングだけに集中させたいと言うことで、あえて周囲に決して誘惑がない場所を選んだのだ。

何もない場所でひたすらトレーニングだけに集中する、過酷な大会前の強化合宿というわけだ。

竜太郎と貴之は直前にその合宿について聞かされ、急なことに驚いていたが、半ば強制的な合宿と言うことで本人の意思で断るといふことも出来ず、結局会長と由希子の言われるままに参加することになった。

クラブ所有のワゴンに乗って4時間。運転手は由希子が務めた。

到着する最後の1時間は人気のない緑に囲まれた道をひたすら進み、いったいどんなところへ行くのだろうかとう4人が不安になるほどの田舎だったが、こうして4人は合宿所に到着した。

いくら遠くを見渡しても娯楽施設はもちろん小さな店すら何もないひたすら広々とした平地だ。かろうじて民家がポツリポツリと見えるくらいだった。

穏やかで平和で癒される場所ではあるが・・・ここから始まるのは2週間の鬼の合宿。

全ては当クラブの期待のホープの二人のため。
大会前の重要な最後の追い込みが幕を開けた。

「はいっ！！もっと肩の力を抜くのよ。腕の振りは大きく、繰り返しが大事だからね！！」

由希子はいつものように二人をしごき、練習に励ませる。

合宿所に到着した日は、長旅で疲れもあり、それに到着したのが夕方だったこともあって練習はせずにひとまず合宿の準備だけをして終えた。

そして次の日の早朝から早速、真っ白な空の下、4人は近くの広場に移動してトレーニングを開始した。

「いいわよ、よく足が動いてるわ。その調子よ！！」

積極的に声をかけながら、いつもと同様、由希子主体で二人をコーチングする。

少しでも悪い部分を発見すると躊躇なく指摘する。厳しい由希子の声が、誰もいない広々とした盆地に響き渡った。

こうして厳しいのも、由希子が二人に期待しているからだ。いくら才能があってもそれだけでは伸びない。二人にはまだ技術的に伸びる余地があると思っていた。

そして一方で、由希子を横でサポートするのは美保。由希子のように大声を出して指導するタイプではないが、もちろんトレーナーである以上、気付いた部分があれば二人に伝えていた。

美保はどちらかと言えば大人し目のおっとりしたタイプではあるが、自身、学生時代にはひたすら陸上競技に励んでいた元アスリート。自らの経験と知識を全て注ぎ込むつもりでこの合宿に参加を決意した。あまり表には出ていないが内心の気合いはある意味由希子以上だった。

合宿所は高地にある。高山の中、と言うほどではないが、空気も比較的薄く、中距離走を種目の一つとしている二人にとってはスタミナがつく好都合の場所だ。

「いい感じですね、二人とも」

少し離れた場所で二人の走る姿を眺めながら美保が由希子に言う。

「そうね、ひとまず合宿初回は良いスタートを切れたわ」

「それにしても、やっぱり由希子さん凄いですよね、私とは声の大きさからして違いますもん」

「経験よ。ずっとコーチしてると、トレーナーはこうあるべきってことが分かるわ」

「あっ、はい！私も学ばなきゃ・・・です」

「頼むわよ？美保さんみたいに優しくコーチングしてたら生徒たち伸びないと思うから。それに、ここで頑張らなきゃどうするの？ここにやってきたのは、彼らを一段上の選手にするのが目的なんだから」

「そうですよね・・・はい！気合入れます！」

しかし・・・。

「どうしたの！？さっきは調子良かったのに・・・もう息切れ？」

合宿3日目辺りから・・・。

少し困った事態が・・・。

「ハアハア・・・ンッ・・・クッ・・・ハアハア」

どういうわけか二人に勢いが感じられないのだ。

意気込んで挑んだはずの合宿開始からまだわずかしが経過していないにも関わらず、二人の調子がイマイチなのだ。

タイムを計測したが、タイムも落ち込んでいる。それも二人とも、だ。

由希子はその調子のダウンを二人に尋ねたが、何故か口ごもって答えようとしない

どうもおかしい・・・。

そしてその日の夜。

4人によるいつもの簡単なミーティングの後、由希子は美保と話し合った。

「どうしちゃったのかしらね本当にあの二人・・・さっきのミーティングでも何だか変だったでしょ？」

深刻な面持ちで呟く由希子。

「・・・確かに・・・」

「困ったわ、こんなんじゃ・・・これからが正念場なのに」

「あの・・・・・・・・」

美保が何か言いたそうな口調になった。

「んっ？どうしたの、美保さん」

「・・・・・・・・あの、このままだと深刻になりそうなので、ホントは聞かなかったことにしようと思ってたんだけど、言います！・・・・・・・・あの、昨日夜に二人の個室の前を通りかかったんです・・・・・・・・そしたら・・・・・・・・」

「俺もう無理かもしんねえ・・・・・・・・確かに陸上は俺にとって大切だけどさ、ここまでストイックな練習でこれからまだ続くと思うと・・・・・・・・正直言うよ、俺、こんなところさっさと逃げて遊びてえよ・・・・・・・・」

「俺も同じだよ。遊ぶ場所もなけりゃ、性欲の解消の手立てもないからな。オナニーのおかずだってないだろ？」

「ほんとそうだよ。ていうかそれが一番痛いかもな」

「もう俺ぶっ倒れちゃうかも・・・・・・・・自由になりたいなあ・・・・・・・・」

「なあ・・・・・・・・このまましごかれるならさ、二人で逃げねえか??」

「・・・・・・・・いいかもな。ちょっと本気で考えとくよ。期待をかけられるのはいいけど、このままじゃこっちの精神がもちそうにないからな」

「本当なの！？それ美保さん！？」

「こんなところまで来て嘘なんて言いませんよ・・・・・・・・二人とも結構深刻そうに話してたから、たぶん本気なんだと思います。だとすると、このままこの状態でトレーニングを続けさせるのはどうかと思うんです」

・・・・・・・・・・・・・・・・

由希子が握った手を縦にして口元に持っていき、しばらく考えている。

「そうねえ・・・・・・・・」

そして、由希子は覚悟を決めたような口調で言った。

「あの二人は、もしかしたらまだ女性経験がないんじゃないかしら？」

「女性経験・・・・・・・・ですか？」

「そう・・・・・・・・まあ露骨に言えばセックスの経験のことね」

——体験版はここまでです——
——続きは商品版でお楽しみください——